

牧之原市の偉人

鈴木梅太郎 博士



世界で初めて ビタミンを発見

含まれる栄養素(特にタンパク質)にあると考えたことで

博士は白米だけを動物に与えて生育の違いを確かめようとしましたが、何度行っても脚気で死んでしまいました。そこで過去の研究を参考に米ぬかを与えたところ、症状に改善が見られました。米ぬかには脚気に有効な栄養素が含まれているのではないかと考え、実験を重ねます。

オリザニンの発見

明治43(1910)年12月13日、東京化学会例会において、脚気は米ぬかに含まれている新栄養素の欠乏が原因であり、これを「アベリ酸(後に



脚気治療剤の權威
帝大教授鈴木農學博士発見
水溶性ビタミンB製剤!
注射用、内服用製品数種あり
オリザニンの脚気に対する治療的価値を、はたして、現代に於いて、余蘊なく、脚気患者を苦しめる、臨床医家の見逃すべからざる治療剤なり。

三共株式会社
製造發賣元

世界で最初にビタミンを発見した郷土の偉人、鈴木梅太郎博士。今年、博士の生誕140周年を迎えました。皆さんも、博士の生き方や功績を知り、ビタミンを生かして明るく元気な地域を目指しましょう。

問い合わせ 社会教育課 長谷川 ☎(53) 2646

几帳面な性格で勉強熱心

鈴木梅太郎博士は、明治7(1874)年4月7日、遠江国榛原郡堀野新田村(現牧之原市堀野新田)で農家を営む鈴木庄蔵の次男として生まれました。

幼い頃から勉強が好きで、地頭方学校(現地頭方小学校)を卒業した後も、私塾に通い勉学に励む日々を送っていました。

「成績は入学してから常にトップ」、「几帳面な性格で、なんでもきちんと整理する」少年で14歳のときには、より高度な勉強をするために家族の反対を押し切り、ひとり歩いて上京しました。

その後、家族の理解を得て、東京農林学校(現東京大学農学部)に入学し農芸化学を学びます。農芸化学とは、化学を応用して農業や食品に関する問題を研究する学問です。

ヨーロッパでの研究

明治32(1899)年、大学院入学後の25歳のときに、東京駅を設計した建築学者の辰野金吾の長女、須磨子と結婚しました。

明治34(1901)年、桑の萎縮病の研究で農学博士を取得し、その功績が認められヨーロッパに留学します。

そして、ベルリン大学のエミール・フィッシャー教授を師事し、タンパク質やアミノ酸の合成・分析について学びます。

最新の化学と見聞を身に着け、明治39(1906)年に帰国し、米食の研究に取り組み始めます。この研究こそが、後のビタミン発見へとつながる重要な研究でした。

米食の研究を始めた動機は、「留学時代に痛感した『日本人の体格が貧弱なこと』の原因が、主食の白米とそれに

オリザニンと改名」と名付けることを発表しました。このオリザニンこそ後の「ビタミンB1」であり、世界で初めて発見されたビタミンでした。

しかし、森鷗外をはじめとする当時の医学界は脚気伝染病説を支持しており、この発見を認めませんでした。医者でも薬学者でもない博士への態度は大変厳しく、「鈴木が脚気にぬかが効くと言ったそうだが、馬鹿げた話だ、鱈の頭も信心からだ、ぬかで脚気が治るなら、小便を飲んででも治る」と言う人もいたそうです。

発表から約1年後の明治44(1911)年、ポーランド人の化学者カシミール・フンクが米ぬかからまったく同じ物質を発見します。

この物質を生命(ビタ)に不可欠な物質(アミン)を意味するビタミンと名付け、その重要性を世界に広めることに成功します。

これをきっかけに、梅太郎博士の功績も徐々に評価されていきます。しかし、日本医学界からの反発に加え、当初は日本語やドイツ語のみの発表だったため、オリザニンの名称が世界に広まることはあ

りませんでした。もっと早く研究が認められていれば、日本初のノーベル賞は博士のものだったのかもしれない。

大正6(1917)年、理化学研究所が設立されると、博士は主任研究員の1人となります。ここでは、ビタミンの製品化や合成清酒、防腐剤など実用品の開発に力を注ぎます。また、日本農芸化学会や東京農科大学の創立に関わるなど、後進の育成にも努めました。

こうした功績が評価され昭和18(1943)年に文化勲章を受章。同年9月20日、69歳で生涯を閉じました。



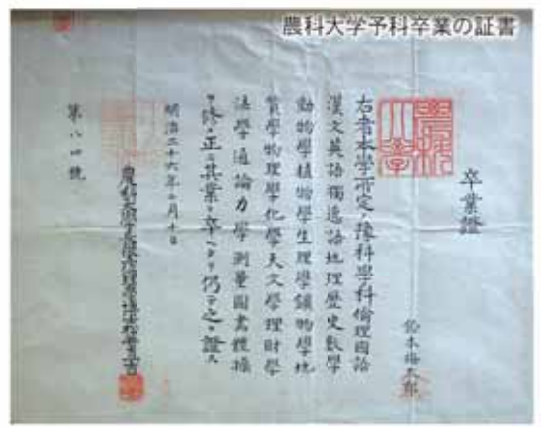
母校の地頭方小学校で児童たちを見守る



見守る(牧之原市堀野新田)でねむる



留学先で研究に没頭



農科大学予科卒業の証書